世界名作劇場

小公女セーラ

プリンセス

『嵐の中のつぐない』

第 34 話

提供　ハウス食品工業

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第三十四話「嵐の中のつぐない」）

セーラ・クルー

ミンチン院長

アメリア先生

ベッキー

アーメンガード

ロッティ

ラビニア

ジェシー

ガートルード

モリー

ジェームス

洋服屋の主人

エミリー（人形）

シーザー（猫）

メルの一家（ネズミ）

1

ミンチン女学院・遠景

嵐の朝——

広場の木々が大きく風になびき、激しい風雨の音と共に、

上空に黒雲が突っ走る。

2

同・裏屋根

バタン、バタン、バタンと—— 天窓の開き窓が風にあおられて

開閉している。

——横殴りの雨足。

3

同・屋根裏部屋

吹き込んだ雨に、ぐしょ濡れの床、机。

音を立てて開閉する天窓を見上げながら、濡れた床の水を拭き集めては、桶にしぼるセーラ——

ベッドには、濡れた寝間着がかけられ、あちこちに吹き飛ばされて舞い込んだ木の葉や小枝までが散っている—

——

ノックの音がし、扉が開いてベッキーが顔をのぞかせる

——

ベッキー「あ、お早うございます、お嬢様」

セーラ「あ、お早う、ベッキー」

ベッキー、入って来る——

ベッキー「ひどい嵐でございますねえ」

セーラ「ええ、昨夜は一晩中寝られなくて」

ベッキー「(見る)まあ、ベッドまでビショ濡れ……」

セーラ「そうなの、窓の掛金がこわれているのよ」

ベッキー「まあ……」

見上げる天窓が――　バタン、バタン。

セーラ「お蔭で、なんだか、寒気がして……」

ベッキー「そりゃ、いけませんです……早く下へ行って、カマドの火で温まりませんと……」

セーラ「ええ、有難う、ベッキー」

4　同・台所

カマドの前で、むせかえりながら、板で煙をあおぐベッキーと、寒さに肩をちぢめて暖をとるセーラ――モリーとジェームスが入って来る。

セーラ「あ、お早うございます、モリーさんにジェームスさん」

モリー「フン……まだ、こんな支度しかしてなかったのかい」

セーラ「す、すみません……嵐で、屋根裏が水びたしになって、後仕末をしてたものですから」

ジェームス「おう、もう直ぐ、昨日頼んどいた石炭が届く筈だからな。石炭置場へ運び込むんだ」
セーラ「は、はい……」
ベッキー「あの……セーラさんは、寒気がするそうなんです。石炭運びは、私がしますから……」
セーラ「ベッキー……」
ジェームス「なに、寒気だと?……フン、そんなものは、石炭運びをすりゃ、汗ですっ飛んじまわぁ」
モリー「そうともさ。ベッキー、お前は早く食事の支度を手伝うんだよ」
ベッキー「は、はい……」
心配そうにセーラを見る——

5 同・表

吹きすさぶ風雨――

石炭を積んだ荷馬車が到着する――降り立った雨合羽の男が荷台に飛上り、大きな木桶（トタン？）を荷台から斜めに掛けると、シャベルで石炭をかき落しはじめる。

6 同・使用人階段の下

階段に掛った木桶を――滝のように音たてて流れ落ちる石炭。

戸口から出て来たセーラ、驚いて見上げる。

続いて出て来たジェームスが、スコップとバケツを投げる。

ジェームス「さあさあ、モタモタしてると石炭が濡れちまうぞ。早く運び込むんだ」

セーラ「は、はい……」

ジェームス、引っ込む――

セーラ、スコップを取ると、絶え間なく流れ落ちる石炭の山から、懸命にバケツにすくい移す――

7 同・地下の作業室

重そうに石炭のバケツを運んで来るセーラ、石炭置場にあける――荒い息で額を拭う。

入って来るモリー――

モリー「セーラ！……院長先生のお許しが出たから、いますぐ教室に火を入れとくれ。それから暖炉の掃除は忘れるんじゃないよ」

セーラ「はい、モリーさん……」

8 同・一階廊下

石炭バケツと、附け木を両手に提げて来るセーラ――

9 同・教室

入って来るセーラ―― 暖炉に行くと、附け木を入れ、マッチをすって火をつける。煙にむせ込みながら、石炭を加える――

――燃え上る暖炉の火。

ドアが開き、アーメンガード、ロッティ以下の女生徒たちが入って来る――

アーメンガード「わあ、嬉しい、今日から火を入れて下さったのね」

セーラ「ええ……さ、どうぞ！」

ロッティ「わあい、有難う、セーラ・ママ」

アーメンガード、ロッティたち、暖炉の火に手をかざす

その時、入って来る新しい服のラビニアと、ジェシー、ガートルード――暖炉に近づくとロッティたちを押しのける。

ラビニア「どきなさいよ！」

ロッティ「あ、あたしたちが先に来てるのにひどいわ、ひどいわ」

セーラ「ラビニア……」

ラビニア、ジロリと見返す――

ラビニア「なによ……ここは、私たちの教室よ……メイド代りのあんたは、暖炉に火をつけたら、さっさと出て行けばいいのよ」

ジェシー「余計な事に口出さないでね！」

どっと笑うジェシー、ガートルードたち。

セーラ「（みつめて）判ったわ……」

石炭バケツを提げると、ラビニアの脇をすり抜けてドアへ行こうとする――

ラビニア「あッ……なにするのよ！」

セーラ、ふっと振り返る——

ラビニア「この服、ママと一緒にパリで買って来た特上なのよ。石炭の粉とばさないでよ！」

オーバーに肩の袖を払ってみせる——

ガートルード「悪いわ、悪いわ！」

ジェシー「謝んなさいよ！」

セーラ「(見る) ごめんなさい……」

ラビニア「フン……謝り方が気にいらないけど、ま、勘弁してあげるわ……それから、私の部屋も温めといて頂戴。あとでジェシーたちとトランプするんだから」

セーラ「判ったわ……」

セーラ、背を向けると、静かに出て行く。

どっと笑うラビニア、ジェシー、ガートルードたち——

見送ったアーメンガードとロッティ、心配そうに顔を見合せる——

10 同・地下の作業場

スコップで、バケツに石炭を入れるセーラ――重そうなそのバケツを運び出す。

11 同・三階の廊下

丸くなって蹲っているシーザー――
重そうな石炭バケツを提げたセーラが、一歩一歩階段を上って来る――
シーザー、ひと鳴きして立つと、セーラの足許に身をすり寄せる――
セーラ「まあ、シーザー……あなたも寒いのね」
シーザー、応えて鳴く――
セーラ「判ったわ……今、温めてあげるから、いらっしゃい」

セーラ、ラビニアの部屋のドアへ――　シーザーも鳴きながらついて行く。

12 同・ラビニアの部屋

同・ラビニアの部屋燃え上る暖炉の火。

セーラ「さ、シーザー……一緒に、身を温めましょうね」

シーザー、鳴くと、セーラと並んで暖炉の前に蹲まる――

微笑で、脇で暖炉に手をかざすセーラ。

13 同・一階廊下

振鈴を鳴らすアメリア――

×　　×　　×

教室のドアが開き、ミンチンが出て来る。
続いて出て来るラビニア、ジェシー、ガートルード以下の女生徒たち——

14 同・三階の廊下

嬌声をあげて駆け上って来るラビニアとジェシー、ガートルード——

15 同・ラビニアの部屋

ドアが開き、飛び込んで来るラビニア、ジェシー、ガートルード——一瞬、はっと嬌声を呑み、見る。

× × ×

暖炉の前に、石炭バケツに凭れて眠っているセーラと、

傍で気持よさそうに丸くなっているシーザーの姿——

唖然と顔を見合せるラビニア、ガートルード、ジェシー。

×　　×　　×

ラビニア「呆れた……こんな所で盗み寝してたんだわ」
ジェシー「おまけに、猫と一緒に寝てるなんて」
ガートルード「院長先生に云いつけてやるといいわ！」
ラビニア「フン……その前に、油をしぼってやるわ！」

ラビニア、そっとセーラの傍に近寄る。

いきなり怒鳴る——

ラビニア「起きなさいよ！」

同時に、セーラの凭れていた石炭バケッを蹴る——

ビクッと眼をさましたセーラ、はっと気づいて立上る—

——

セーラ「あ、ごめんなさい……私、いつの間にか……」
ラビニア「なにが、いつの間にかよ……私の部屋で勝手に寝込むなん

て、図々しいったらありゃしないわ！」

セーラ「許して、ラビニア……私、とても寒気がして……一寸温まらせて頂いてるうちに、つい……」

ラビニア「云い訳は沢山よ！……なによ、猫まで勝手に私の部屋に入れたりして……」

セーラ「あ、シーザー……！」

シーザーは気づかずに眠っている。

ラビニア「連れて行きなさいよ！」

いきなりシーザーを蹴飛ばす――

ギャァッ……と飛び上ったシーザー、夢中で部屋の中を逃げ廻る。

セーラ「シ、シーザー！」

どっと笑うラビニア、ジェシー、ガートルードたち――

――

逃げ廻るシーザーが、一瞬、ラビニアの机の上に跳び上

り――羽根ペンを立てたままのインク壷を後足で蹴りざま床へ躍る。同時に、宙に素っ飛んだインク壷が、もろにラビニアの胸許にぶつかり、パッとインクが飛び散る――

ラビニア「ああッ……！」

セーラ「シーザー！」

一瞬！　シーザーはその儘開いていたドアから廊下へ飛び出す――

茫然と自分の服のインクの飛び散った胸許を見るラビニア――

息を呑むセーラと、ジェシー、ガートルード――

ラビニアが顔をあげ、激しい怒気でセーラを睨みすえる――

ラビニア「あんたのせいよ……」

セーラ「え……」

ラビニア「勝手に猫を入れたあんたのせいよ……」
いきなり奥の寝室に駆け込む
茫然と立尽すセーラ――
ジェシーとガートルードが、ぱっとドアに走り、後手に閉める。
ジェシー「逃がさないわよ」
ガートルード「そうよ、責任をとるのよ！」
――立尽すセーラ。

16 同・廊下

ニャオン――と鳴いて身づくろいするシーザー。

17 同・ラビニアの部屋

寝室のドアが開き、いつもの服に着換えたラビニアが、
先刻の服を手に現われる。
ラビニア「見なさいよ！」
拡げた服に、飛び散ったインクのしみ。
ラビニア「私の一番新しい、一番高い服が台無しじゃないの！　弁償しなさいよ！」
ぱっと服を投げつける――　はっと受け取めるセーラ。
ラビニア「フン……と云っても、今のあんたに弁償なんて出来る筈なかったわね……いいわ、兎に角、その服を元通りにしたら許してあげるわ。でない限り、どんなに謝ったって許してなんかやらないわよ！」
冷笑するラビニアと、ジェシーたち。
茫然と立尽すセーラ――

（中　C　M）

18 同・表

――激しい風の唸りと、
――叩きつける雨足。

19 同・使用人階段の下

扉が開き、ボロ傘と買物篭を手にしたセーラが出て来る
――
激しい風雨の音に、路上を見上げたが、傘を開く――
大きなつぎが当っている。
肘を通した買物篭には、古新聞で包んだ包み――(ラビニアの服が入っている)。
セーラ、階段を昇って行く――

×　　×　　×

そのあとから、扉が開いて、心配そうに見送るベッキー ——

ベッキー「お嬢様……」

20 同・表

使用人階段を上って来たセーラ、地下とは違う風と雨の強さに、一瞬たじろいだが、通りへ歩き出す ——

21 道

風雨の中を行くセーラ ——
強風に傘ごと吹き飛ばされそうになる。
危うくふみとどまったセーラ、仕方なく傘を少しつぼめ、向い風に前かがみで突き進む ——

忽ち、全身ずぶ濡れになるセーラ——

22 街の一角

来るセーラ、立停る——

×　　×　　×

舗道の対岸に並ぶ商店街——

×　　×　　×

セーラ、思い切ってその方へ向う——

23 高級子供服店の前

セーラ、来て立停る——

24 フラッシュ（第二話より）

ウィンドに駆けつけるセーラ、クルーに呼ぶ――

セーラ「お父様、早く……エミリーよ！」

クルー、急いで近づいて来る――

セーラ「見て、お父様……エミリーは、ここで私たちを待っててくれたのよ」

見るクルー――

25 高級子供服店の前

セーラ、じっとウィンドを見つめる。

セーラのM「……お父様とここへ来たのは、なんだか、ずっと昔の事だったような気がする……あの御主人が、私を憶えていて下さるといいのだけれど……」

セーラ、そっと店の方へ近づいて行く。

26 同・店の中

若い店員と品物を調べていた店の主人が、ふとウィンドに気がつき、おやっとなる。

×　×　×

ウィンドの外に――ずぶ濡れで店内を窺っているセーラの姿。

そのセーラが、入口の方に移動する。

×　×　×

驚いて視線を移す主人――

27 同・表

ドア前で、大きく息をついて決心したセーラ、思い切ってドアを開ける――

28

同・店の中

入って来るセーラ――

セーラ「ごめん下さい……」

眼鏡ごしに、待ち受けて見守った主人が、驚きの声をあげる――

主　人「こ、これは驚いた……あなたは、いつぞや、うちに見えたあのお嬢さんじゃありませんか」

セーラ「は、はい、御主人……」

主　人「ふうむ……それにしても、その身なりは、なんと云う変りようです……」

セーラ、じっとうつむく――

主　人「成程……ひと口では云えぬ事情がおありのようだが……」

セーラ、静かに顔をあげる

セーラ「私……御主人にお願いがあってうかがったんです」

主　人「ほう……私に、願い？」

セーラ「はい……これを……なんとか、元の通りにして頂きたいのです」

肘を通した買物篭から古新聞の包みを出し、中から折り畳んだ例のラビニアの服を取り出すと渡す――

主　人「ほう……これは、パリ仕立てですな」

セーラ、頷く――

主人、服を拡げて、はっと見る。

――胸許に散ったシミ。

主　人「こ、これは、インクのシミ……」

セーラ「はい……お友達の、大事な服なんです……元通りにならないと、私……私……」

セーラ、涙に声がつまる――

主　人「判りました……難かしいが、なんとかシミ抜きをほどこしてみましょう」

セーラ「ほ、ほんとですか……」

主人、微笑で頷く――

主人「所で、どこかへお使いに行く途中ではないのですかな？」

セーラ「はい、コベント・ガーデンまで買い出しに……」

主人「それは大変だ……では、先にその用事をすませて来て頂きましょうかな……うまく行けば、その頃までに、この服をお返し出来る事になる」

セーラ「はい！　それでは帰りにまた……」

主人「（微笑）お預りしましょう」

セーラ、会釈すると出て行く。

頷いて見送った主人、改めて店員と顔を見合せる――

29

コベント・ガーデン市場

叩きつける雨足――

無人の通りを――風に吹き飛ばされた空樽が、音をたてて転がって行く。

×　　×　　×

傘をさし、茫然と見廻すセーラ――

セーラ「駄目だわ……この嵐で、何処のお店もお休みなんだわ……ほかの市場を探してみなくては……」

30
別の市場

ガランとした無人の市場通り――

探しながら来るセーラ、立尽す。

セーラ「ここも全部お休みだわ……ピーターがいれば、開いているお店を教えて貰えたのに……」

セーラ、仕方なく引返す――

31 街路

戻って来るセーラ――
ふと立停り、額に手をあてる。

セーラ「いけない、風邪を引いたのかも知れないわ……頑張らなくては」

セーラ、また道を急ぐ――

32 高級子供服店の前

傘をたたみ、入って行くセーラ――

33 同・店の中

セーラ、入って来る――

奥で、主人が振返る

主　人「やあ、お待ちしてましたよ」

セーラ「あの、直ったんでしょうか」

主人、背を向けると作業台から何かをとり、振返って、ぱっと拡げてみせる。

――きれいに直ったラビニアの服。

主　人「はい、この通り……私が、腕をふるってシミ抜きをしておきましたぞ」

セーラ「まあ……その上アイロンまでかけて下さって」

主　人「（頷く）これなら、お友達とかに文句を云われる筋はない筈ですぞ」

セーラ「あ、有難うございます！　御主人」

主　人「では、おつつみしますからな」

主人、若い店員に、服を渡す――店員、油紙で丁寧に包装しはじめる。

セーラ「あの……」

主　人「む？」

セーラ「お代の事なんですけど、実は私……」

主　人「とんでもない。うちの人形……そう、エミリーと名づけて下さったんでしたな。あのエミリーを大事にして下さってるあなたから、一ペニーだって頂く訳には参りませんよ。御心配なく」

セーラ「まあ……」

主　人「所で……失礼ですが、大分身の上がお変りのようですな。よろしければ、訳をお聞かせ頂きたいのですが」

セーラ、じっと主人をみつめ、頷く。

セーラ「私は、もう……昔の私ではないんです……お父様が亡くなって、学校のメイド代りなんです」

主　人「ほほう……」

セーラ「でも、お世話になった事は、いつかきっとお返しに上るつも

りです」

主人、深く頷いてみせる——店員が、油紙で包装した服を主人に渡す。

主人、受取ると、身をかがめて、セーラに渡す——

主人「この嵐でも大丈夫のように、油紙で包んでおきましたぞ」

セーラ「有難うございます、御主人……」

主人「では、気をつけて……どんな嵐にも負けんようにね」

セーラ「は、はい……」

セーラ、微笑で主人と店員に会釈すると出て行く——

眼鏡ごしに見送って、店員と顔を見合わせる主人、十字を切り、手を組む。

主人「どうか、神様が、あの子をお守り下さるよう……」

34 道

帰って来るセーラ――

突然、突風にあおられ、バシャッと傘がオチョコになる。

仕方なくその傘を手に、買物篭に入れた油紙の服をかばうように、風雨の中を行くセーラ――

35 ミンチン女学院・表（夜）

ミンチン女学院・表（夜）ガス灯が、風雨の中にまたたいている。

――ずぶ濡れで帰って来るセーラ。

36 同・台所（夜）

威丈高に立つジェームスとモリーの前にセーラ――離れて心配そうなベッキー。

ジェームス「なんだと?……嵐でみんな店が閉ってただと?」
セーラ「はい、それでとうとう買物が」
ジェームス「じゃあ、なんだってサッさと帰って来なかったんだ。え?　一体何時間ほっつき歩いて来やがったんだよ」
セーラ「そ、それは……」
モリー「フン、お前が帰らない事は、ちゃんと院長先生に報告してあるからね。さ、眼の前で申し開きするんだよ!」
セーラの腕を攫んで引立てる――

37

同・地下の食堂

夕食をとっている女生徒たちと、見廻っているミンチンとアメリア。
モリーがセーラを引き立てて来る。
モリー「院長先生!　帰って来ましたよ、この人騒がせが」

ミンチン「（ジロリ）何処へ行っていたのです」

セーラ「は、はい……実は、ラビニアさんの服のシミ抜きに……」

ミンチン「お見せ！」

近づくと、いきなり包みを奪い取り、油紙を引破って服を摑み出す。

アメリア「まあ、ラビニアさんの一番新しい服に間違いありませんわ」

ミンチン「ラビニアさん……セーラの云う事は本当なんですね」

ラビニア、席から立つ――

ラビニア「はい、その通りです……彼女は、私をねたんで、わざとその服にインクをこぼしたんです」

ミンチン「なんですって？」

驚くセーラ――

ラビニア「それを、私たちに見つかって、仕方なくシミ抜きに行ったんです」

セーラ「ち、違います、院長先生！」

ミンチン「お黙り！……お前と云う人間は、なんて心がねじけている
んです……モリー、今夜はたっぷり仕置きしておやり」
モリー「は、はい、院長先生……さ、おいで」
モリー、セーラを引立てる。

38
同・台所（夜）

どっと床に素っ飛ぶセーラ――
モリー「フン、サボってた分だけ働かないうちは寝かさないからその
つもりでおいで」
モリーとジェームス、出て行く。
ベッキー「お嬢様……」
駆け寄ってセーラを抱き起すベッキー。

39
同・三階廊下（夜）

眠っているシーザーが、起上る――

セーラをいたわりながら上って来るベッキー

ベッキー「お嬢様……どこかお悪いのでは？」

セーラ「ううん、大丈夫よ、有難う」

40

同・屋根裏部屋（夜）

入って来るセーラ、外のベッキーに、

セーラ「じゃ、おやすみ、ベッキー」

ベッキー「おやすみなさいまし、お嬢様……」

セーラ、扉をしめ、ベッドに近づく。

突如、崩れるようにベッドに倒れ込む。

セーラ「お父様……」

その眼から涙が溢れ出ている――

×　　×　　×

壁穴の前で、怪訝に見上げるメルの一家。

（第三十四話終）